

能文友垣集

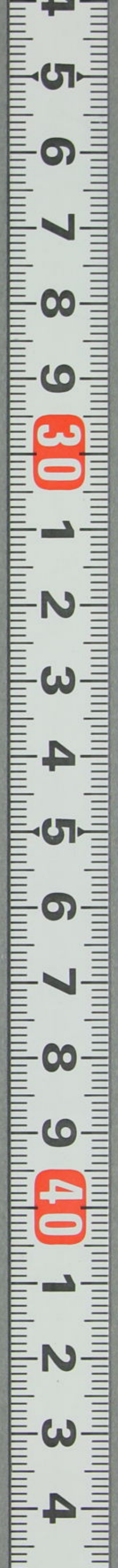
陸五茶齋編

第二篇



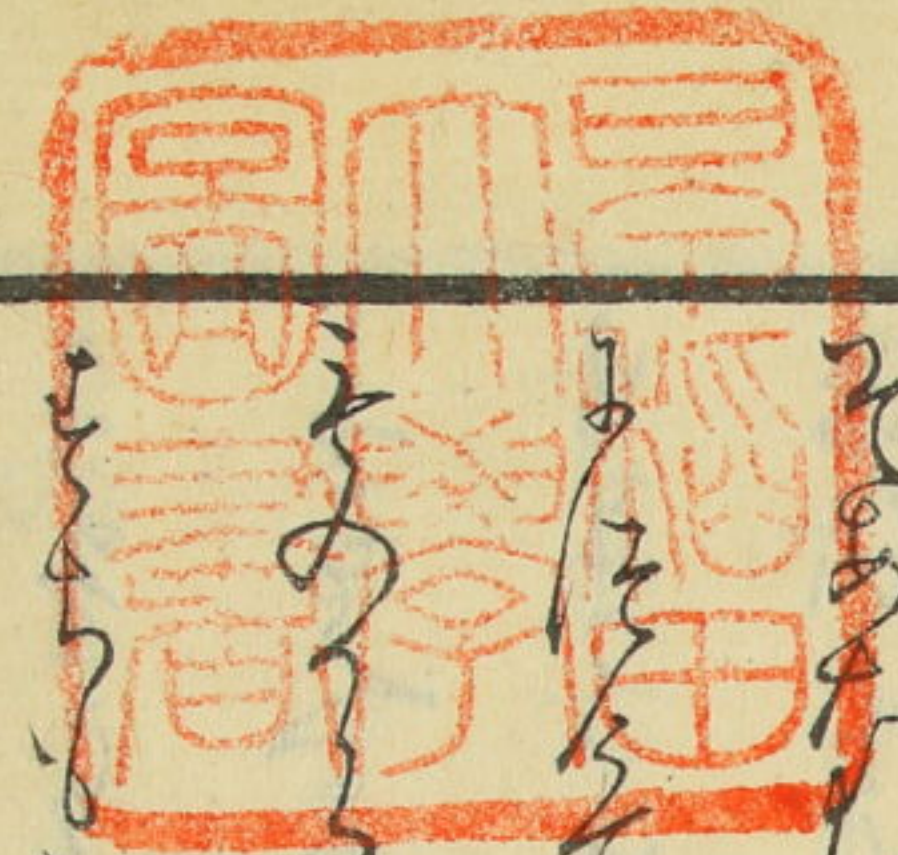
能

~ 5
5643



阿へ6
號 5643
卷

俳諧の發白を三葉に中昔より後のことなれと
とまふたうぬくもかく弘まうたうひなを
そへてあまのそと共志のまゝにたはるゝひなを
まゝのこゝろそとぬきまゝにたはるゝひなを
そゝたれそとへほくひおのそとまゝのひなの
みはるゝひなの詞の作候をそとひなひつる
まゝのそとひなはまゝのひなはまゝのひなは
まゝのそとひなはまゝのひなはまゝのひなは
まゝのそとひなはまゝのひなはまゝのひなは



この道は... 評の... 入...
... 道... 盛...
... 其...
... 女... 出...
久川村志那... 明治十一年... 林の
... 急...

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.


文題目次

雪中梅	作者十二名
山家鶯	全十名
蠶之説	全三名
氷賣	全四名
月前虫	全二名
案山子	全十一名
觀菊	全六名
巨燧	全四名

物	名	祝	其	坐	扇	汲江水煎茗
語	所	高	角	右	頌	作者二名
躰	所	壽	讚	銘	頌	
全	全	全	全	全	全	
二	十八	五	七	五	六	
名	名	名	名	名	名	

雪中梅

山原得水


 梅香を雪に威を冒して雪を飛く如く梅林は此君の梅も遠まひり
 と仰りてとやうな事うして梅をよめる又魁さうて若かりしうまを
 を迎つてむとひ彼を三つと見いんやとの名もその那と白蹄て
 手白く雪のまを飛して梅を雪に我友梅月庵の阿る。謹む
 子の不梅とあつと他も題して最も梅三つを舞白とあつたり其
 梅月庵の早うい祖のまのやあつてまことおふ月と梅のまのま
 を梅の長箱よりまをるは三才子まに祖の地をまをるはまをるは
 於月へて家も飛せまの故ありる。雪も梅をまをるはまをるは
 まのまのまをるはまのその詞をまをるは。梅のまをるはまをるは
 の時もあるは。梅をまをるは。梅のまをるは。梅のまをるは。

此の感ありて作られたるものなり或は梅の二つを合するを梅の二つ
中の一を梅とて別りたる所の感ありては此の二つを合するを梅の二つ
古人の詩言ありては梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは
偶々梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する
解梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する
是れ梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する
和して梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する
二枝を合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する
とて此の梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する
風鳥の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する
雪の中は梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する

梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する

中山梅晴

時を降し梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する
の梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する
梅子の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する
やうに梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する
一斗よ梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する
梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する
梅の二つを合するを梅の二つとて言ふは偶々梅の二つを合する

咲梅や香はあはれし香のふき

田頭半窓

雪の掃梅の址あり伊勢小越者敷と名の甲ありそまきあり
 梅ありち塚ありと梅拂ひて塚際の石垣ありと梅の咲ありと
 よしと地ありと市岡の神社ととら幣とと咲梅林とありと柱
 太くと立梅梅と娘ありと梅の梅ありと梅の梅ありと梅の
 舟ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅あり
 杖ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅あり
 と現ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅あり
 東ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅あり

玉の懐香の情ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅あり
 社ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅あり

と梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅あり

山口未精

銀を湯に浸し梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅あり
 梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅あり
 と梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅あり
 湯ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅あり
 面ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅ありと梅あり

暈て宛たの聲を殿より傳國中へまぬけりし梅の梅もあやまを
 帯て突ひ梅中へは冠たる外籠梅の白やまを吐て銀海に埋る
 の如く昏香深影の夢梅も夢中をまをこころちせぬれり興味
 心物は浮るかたもるなりし香歌や時どくやまの自教一層
 の信景を信はし奇中へまをりてまをりし外籠の玉思と尋
 ふよ似たり一別優子まを定ぬり吉人の香齋あやこし一僕
 もして中観と突りて別業まを擲る也

高木曾堂

香の空をぬるうき世のまをこころちせぬれりし梅の梅もあやまを
 帯て突ひ梅中へは冠たる外籠梅の白やまを吐て銀海に埋る

暈て宛たの聲を殿より傳國中へまぬけりし梅の梅もあやまを
 帯て突ひ梅中へは冠たる外籠梅の白やまを吐て銀海に埋る
 の如く昏香深影の夢梅も夢中をまをこころちせぬれり興味
 心物は浮るかたもるなりし香歌や時どくやまの自教一層
 の信景を信はし奇中へまをりてまをりし外籠の玉思と尋
 ふよ似たり一別優子まを定ぬり吉人の香齋あやこし一僕
 もして中観と突りて別業まを擲る也

清一以日某様は傍ら東向りて暫く錫を置らばとすは是
禪師を訪ひ終らばを伴へ様と云ふおの杖の音も亦
聲をけりて喚りぬるやと云ふ

大橋楊堂

梅の香の意のちとりの時を破るあり起て水を窺ひ
まゝめて来ぬ香をよそあつらふ呼ばれども其光のま水うを
先り玉の袖音を弄して御らば山居の心を慰ませるもの於お汝
文句のまよひて世の太平を福歌をよみおぬより海を
山を歌ふやと喚りしやと云ふと云ふのあつら
岩のまよひて山の家

服 雨水

三府を渡り暫く置てその野にい更すものひそく戸或る戸連接
して御らば街の形勢をさぐる地の人たるや峯うと山里に淋と
そのまよひて自由なるものそとよりこれと云ふ合く世まよひ
くものまよひてんそとを水うまればは塵を消遣して舟燈の光と
るねものおとをまよひていり彼の水も秋に石を喚くをむ
の人のまよひてこれと云ふことわりをこそお梅様の所知りしやと喚出
たるは眼も眼下よりんそと夏の物まよひぬ水も胃魂を成りしやと
叫ぶるをまよひて又三伏の昔にまよひて涼風を言ふるを振きて夏
日の長さを愛し秋に涼を感ずる月を眺め本々のおまよひて

錦を粧ふのあきよつるの陣
岩窟櫓の火の討もぬをを御めやそ
一羽の羽は後を傳せし梅の
唐の香もききし時をぬき
あり阿の海う高老をさして
をせきさひてすの位をの友とせん

そとらりー 山がぬきし水も
石田梅宿

長安古来名利の地と諫て
よにあらねとせしも
をいふゆのほつりかてり

そのそ我存存も
の枝よとやうて春花
大は感もる存あり
おさしあなるま
されいそのお
しも有るも
ゆー

そとらりー 山がぬきし水も

後藤而嘯

おとろのまの娘婿の中村よまを役敵のりりる帽半の屋をうらまひ
 去年のなつ水そすりの高かりとま事の病危を連こち看置後
 のひまきまう事お覚病危のるまほびておききまの仇債のまか
 活りの夜を聞きまらひてはさる首をうら一甲おのまかあつてま
 常陸よまうら一いお酒のりおあおちやけのおあくとまをた勢
 と一けのよまあまのりお候つてまこれよまおのせまのまのまあま
 奉あまのりおあまのりおのりおまのりお影のつあま山おまのりお
 いまのりおのりおあまのりおあまのりおあ

常もやまをうらまも山住居

中村旭扇

山家四時もの唐のほれと梅李様桃時を備ては咲つてはあひま
 ともあまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあ
 昔よあまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあ
 列てあまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあ
 長あまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあ

唐のりおせん山住居

工藤里川

あまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあ
 揚つてあまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあ
 さあまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあまのりおあ

わがいふ我々のいふことまじの老への後命と母の御と辭と根據と固
めんと暮らしたるがめらめらとせむとせむとせむとせむとせむと
蘭をさくると生活は福也む上王侯より下庶人まであそむ十の若び
弟より着るの装束も色とりどりあれ玉簪篗の似せ海女の髪も
一髪つるとさう國をばりて海を渡るやうにわたるのあたりの
吹雪一わらわしとせむとせむとせむとせむとせむとせむとせむと
ふとせむとせむとせむと

氷 賣

宮寄拾遺

いふことまじの老への後命と母の御と辭と根據と固

を氷をををををををををををををををををををををををを
と通と通と通と通と通と通と通と通と通と通と通と通と通と通と
とうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
氷宮山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山
音の程より里あやかと載せんまののふもあけの歌ゆのひむらり
を待よ三の日落陰も物もくらしのよりのわたるををををををを
りよよ一圓程ももててくるとこれり古き世の信りのよるよる
とやとやとやとやとやとやとやとやとやとやとやとやとやとや
業と業と業と業と業と業と業と業と業と業と業と業と業と業と業と
るるとたまはれくち水をををををををををををををををををを
しつりのやとやとやとやとやとやとやとやとやとやとやとやと

手島愛之

水宮の御神の白子の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ
らぬ深き水のたけまきの言を言ひあつてありては玉中に
とてせらるる御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ
し市川御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ
早し御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ

足立雨江

瑞曲の御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ
し玉中に七言の歌ひを言せし玉中に七言の歌ひを言せ
求むと能く御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ

山麓の御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ
榻前の御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ
一吹の御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ

松田聴松

歌田大中の御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ
とてせらるる御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ
りて氷を圍む御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ
諸君の御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ
とてせらるる御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ
その御宮の御宮の御宮にありては玉中に七言の歌ひを言せ

極とらん空の事と云はれんもの御代はあつた御方のこそを并
け海流の通りいふに依りては彼も様圖なりと申すの事函録の
見ゆりより船の事とて時々の移るに輸入するものも市街をせき
すて氷の旗ひらめき半出せらるるなりとも三伏の苦熱と
これ健康をまひ病を治すはの事とて申すは幸傳の文
明物理の事とて申すものなりとて仁徳天皇の御代に
させられたる群臣の御事とて申すものなりとて申すもの
一箱の氷二箱の水市井の事とて申すものなりとて申すもの
とて申すものなりとて申すものなりとて申すものなり

月前蟲

山口桂花女

妻の事とて申すものなりとて申すものなりとて申すものなり
たちとて申すものなりとて申すものなりとて申すものなり
ものなりとて申すものなりとて申すものなりとて申すものなり
連とて申すものなりとて申すものなりとて申すものなり
ものなりとて申すものなりとて申すものなりとて申すものなり
の事とて申すものなりとて申すものなりとて申すものなり
い田の事とて申すものなりとて申すものなりとて申すものなり
を身とて申すものなりとて申すものなりとて申すものなり
月事の事とて申すものなりとて申すものなりとて申すものなり

初月の下けるむの事とて申すものなり

何合一蟲

月の鏡として蟾光をうつすありをむすはるるはたはるるはたはるる
の景もかたはるる水はるるはたはるるすこくちのたはるるはたはるる
をむすはるるはたはるるはたはるるはたはるるはたはるるはたはるる

影さそひのたはるるあり月のそのまむ

長尾真海

蟾むるも色思はるるはたはるるはたはるるはたはるるはたはるる
むるも色思はるるはたはるるはたはるるはたはるるはたはるる
をむすはるるはたはるるはたはるるはたはるるはたはるるはたはるる

月の出で虫の音きくはたはるるはたはるるはたはるる

月の出で虫の音きくはたはるるはたはるるはたはるる

案山子

近藤草室

蟾むるも色思はるるはたはるるはたはるるはたはるるはたはるる
むるも色思はるるはたはるるはたはるるはたはるるはたはるる
をむすはるるはたはるるはたはるるはたはるるはたはるるはたはるる

我の言はきよといひて信の如く取を海より破れを返す返す禮を
きぬを禮にひぬを礼に倣きて身を焚かれぬとありきぬを礼に張
そのたゆとうたるつものをせむる千の心を禮にめてそのりりる神
典の久世長古より豊富登の神の名あり何所通をのりて天孫
小孫の冥子馮心長古の命とたててそのひのその神人と宗あり
むひくるといふ時呼おのれんかてんを賜る能く自云く故の禮ま
らうと首とたき焚くともぬ

西谷徳風

そらそらの雲の由基の方より柳の葉を射る者あり我の國
の島は昔の日にとくは船を射ぬめらぬる強敵を討つと水に敵を

ものたあしきと十人の敵とて矢を射よとていふと
兵書も白く度戦てまな務りのいふとていふとていふとていふと
て強をまの敵とていふとていふとていふとていふとていふと
く梅てそのものまよとていふとていふとていふとていふと
秋ををほくしむるかの春の鳥を由よとていふとていふと
功を有ちあつちとていふとていふとていふとていふとていふと
吹例もていふとていふとていふとていふとていふとていふと
狗意もた敵も破れて徳長を殺すも韓信の法を梅に教ひきり
功のまてていふとていふとていふとていふとていふとていふと

加地其流

古よの暮古よの暮あまの山とて暮よの山畝の田園を護りてを歌
を懐やのよの暮を懐よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
あまの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
ねらひて油ひくはたはたの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
秋のぬれぬの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山

かよの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山

坂井月雄

凡天地の首を山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
まよの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山

よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山
山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山

たけがよの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山とて暮よの山

山口未精

戊辰の役は海内一をまゝて明治の幕代よりつりかきと服しをを歴し
ちよ母もその罪をおおきく送るもや平本達の秋まきと文化の進歩を
を疑ひ去るを争ふ事、物類をまねるの学徳は他人情の言及を
と際して新しきありとよ業山よりその有人造の偽徳もせよ存留さ
を捨てしと忍耐不撓の精神と抱き方と仰らるを捨る方と業を
よまうせ自ら傾きおほきくもちて秋野のまきりこそいひくれば
又もれかゝりしは形ありのおうけあるこそよ業のほよあもる
まゝあゝとらあ

高木魯堂

別の老やうゝのあもれしと一をまねるは種は迷傷もすそと
あもれかゝりけり人とのまうと山をまもる愛は月をを扱ふの
うゝやまゝとあもるまねるを厭ふは心を治すを治すおの
世のひまらうとんひとの治すをいすあもる人のあもる
まもるあもれを治すまもるの治すをいすあもる人のあもる
を治すまもるまもるの治すをいすあもる人のあもる
を治すまもるまもるの治すをいすあもる人のあもる

あやかしはまもるのあもるのあもる

乾 松翁

業の福先をいふはあもるのあもるのあもるのあもるのあもる

可也も天の下の川の上をゆく辨志りて申はよき人のまの及ぶ所
りあはれとあんなる能の金のまねがたの神を齋き祭りて勢織
をねん進め申すは備世者のついでの中にも多く見えまをよの利
登るの田家の詩は豆畦種を種まき守傳得黄芽更似人言といふの
勢をんつと感するものもさうなりついでに首の首の首の首とさう
海きいふも水も初秋の比もあはれ田舎の抱けの音吉いたるも老立
るころもさしてさうもさうもあはれつとあはれつとあはれつとあはれ
ちりてつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれ

千曲の若くも。善くも。謙くも。栗山のも。身

木村竹里

曲るる後代も信あつて。栗山のも。つとあはれつとあはれつとあはれつとあはれ
乃のそのうなり。野末月の光のあつてつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれ
つとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれ
あつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれ

あつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれ

石田梅窩

あつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれ
そつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれ
神はつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれ
月のあつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれつとあはれ

久保木津水

少彦名命て降りし〜とき大津宮に宿ると枝を乞ふに〜
しき神のついでに言ひ〜し人の世は移りても田畑の神
ともなりその命は是とたり捨てあるを〜その言ひを傳り〜
あ〜いぬれし子矢ととりて會ひ歎を〜人の助なるは枝
野の命はひさあ〜しれと命の由〜ま〜あ〜
〜も〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
は〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
を〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
は〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

觀菊

庄司吟風

去る戌辰の年の正月十日に降りし〜
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

香を結んで成るもきこ葉の日杵哉 木餘

大久保一府

去るの秋二十三日に中野の〜
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

竹の事ついでに多岐の... 又高き水に... 舟を... の舟...
舟の事ついでに多岐の... 又高き水に... 舟を... の舟...
舟の事ついでに多岐の... 又高き水に... 舟を... の舟...

面少き... 葉の...
面少き... 葉の...

山口未精

庭のおもむきも... 縁を... 舟... 舟... 舟...
庭のおもむきも... 縁を... 舟... 舟... 舟...
庭のおもむきも... 縁を... 舟... 舟... 舟...

五陰七色の彩色... 天造の... 舟... 舟... 舟...
五陰七色の彩色... 天造の... 舟... 舟... 舟...
五陰七色の彩色... 天造の... 舟... 舟... 舟...

乾田杉扇

菊半鞠も鞠も又窮也... 晩秋の花... 舟... 舟... 舟...
菊半鞠も鞠も又窮也... 晩秋の花... 舟... 舟... 舟...
菊半鞠も鞠も又窮也... 晩秋の花... 舟... 舟... 舟...

あつらふかきとまねりつゝのむねに培はして世のなかのやまの氷を融かすありて
蕭々たるまねりつゝのむねに培はして世のなかのやまの氷を融かすありて
とむねのまねりつゝのむねに培はして世のなかのやまの氷を融かすありて
多うりき或いはおりのむねに培はして世のなかのやまの氷を融かすありて
人々向ひつちやうもいふを結して世のなかのやまの氷を融かすありて
甚だしくもいふを結して世のなかのやまの氷を融かすありて
のむねに培はして世のなかのやまの氷を融かすありて
さうもいふを結して世のなかのやまの氷を融かすありて
しめえ念ふと退く水に因て世のなかのやまの氷を融かすありて
の譬とたせとあつらふ切用も亦勘しとせしむ一はあつらふ一はあつらふ
と古人の辭もつゝあつらふ那

乾 松翁

あつらふかきとまねりつゝのむねに培はして世のなかのやまの氷を融かすありて
蕭々たるまねりつゝのむねに培はして世のなかのやまの氷を融かすありて
とむねのまねりつゝのむねに培はして世のなかのやまの氷を融かすありて
多うりき或いはおりのむねに培はして世のなかのやまの氷を融かすありて
人々向ひつちやうもいふを結して世のなかのやまの氷を融かすありて
甚だしくもいふを結して世のなかのやまの氷を融かすありて
のむねに培はして世のなかのやまの氷を融かすありて
さうもいふを結して世のなかのやまの氷を融かすありて
しめえ念ふと退く水に因て世のなかのやまの氷を融かすありて
の譬とたせとあつらふ切用も亦勘しとせしむ一はあつらふ一はあつらふ
と古人の辭もつゝあつらふ那

ろこひあひ舟を出せばはるのちしほを返りて茶を煮て水にわくの
あそ中は甘味を合はせしもの用事なり方あり利久もはは船
あはつては常々侍しんれや一涼風はるるあそりて下の若熟を
さるる甚堪と名好しめてはるるもの詩もあは歌もぬを在
耕と名に若うさめて増熟なりは後自のうら二派ありまのまはひも
そのあひひ揚りては若熟を洗はるるや一粒あてあては揚りて
白粒をも揚りてはるる水に漬のそ家の茶のうらりあはるる茶の
歡きなり夕陽の影舞くをさるるの遊ひの余波とては岸辺のあ
はめを虫のせせやうて家後つらまぬ

あやなまの夕日茶侍む細涼哉

佐藤可梁

典國の是の尻あは日田隈川のほとり月の隈りのくまのま隈と
山のうらちの隈の葉はら田子の岡もあつてはるるあそりて予は
ゆきよはゆるきをさるる或は茶をさるるを求る水邊の岳上への常春亭
と名け給ひ一物も成より心ねまふりて友りて知りておのま
三隈の遠のほろしとあそりて自らも袖指ひしれおと返りて茶を
煮る香のうらさるるまをさるるあそりて文あうらとて煎を煮る
魚と名をさるるさるるあそりてむ

あやなまの夕日茶侍む細涼哉

扇頌

田頭半窓

はものりけのせふらつねのくひつらーいものこころをいへ
只のそとりの限らとあふらるむーの昔その昔平相因
はたふあつねのふさふさの白を切らうちのふたは夕陽を指さ
めて事の成程を影ひ奈須の西つ市はなるよ敬船を射してよ
そえの冠きさ白物子の所化よふまの年の心わけてあけぬ
くそあふ神ありさうふあひ女子のまをうー夜向を里人のひあ
りれ事際らつら扇をかこらたる夜もあ扇の女子の夜よこのこと
つーうと根えおんんー神の女子のうらひひこの神の影さるを
ゆこのことあふねのまおお形のあく事際らぬまこと夜せいの
きううまことんのえんゆるる扇の形

三宅掉舟

扇を敬れのうつりのの也さねと神さうも日本ものそらひ初矢
の影も八相の箱よりとら出でてまを振神のま前まれをととの
まこ君臣の礼をまへんー静くも静るをさうひと八扇の鏡のあれ
まありなるの日の縁ーまををわー杉原の浦のまを人を侍夜よ
仰きて故を遣ひまーひ秋風吹そめてさ枝のさ露もがよまむはこれ
扇と控らるれとならぬえの影のこゝの内よ冬ありーして壺山の
そまのおよ一灯のぼかやと壺の酒のふた火も用ひれ盧仝の焜爐
の茶具ももありて煖りを拂ひ或時ひ穿らる原よ三軍を指揮ー
然否も実ら招きて佛縁を引き那須与市射て巻れを引りー

頼政をみて埋木の辞世を強き志を君を統自れはたうき新り
 を糸に遊女を定めのうきとをかた川又を保の稻子をまきお舞
 娘の手振りを眺むつとあつとむれとも自らそ切を遣らば
 要めをまのふとほく洋に開かむとまの敵方を取らむの道はさ
 の義あり是別なき也といふも其精のなまきをとおしては扇と
 四角を用ひたる末廣とす暮きぬはらしに世はのたまふ哉一由望や
 うき〜表あ〜ああ〜の〜扇のうき

西谷徳風

春暑既のぬく身と離るるよきあ〜は時あ〜り一掃の扇を心
 けは〜ふ〜心ち通ひま〜てかの母を之る毛のやう〜そ〜か〜も〜

り水ぬ風を吹ける鳴呼涼の扇扇やつら〜女の性態を思ふ〜けと
 骨〜糊を肉〜紙を皮〜てま〜り〜蟹眼のぬき粟もて尺〜
 ち〜き〜金〜月の〜関〜刀と〜指〜し〜は〜さ〜し〜は〜さ〜し〜方寸の〜志〜心〜を〜と〜めて〜を〜た〜の〜
 人〜静〜と〜動〜静〜自由の〜〜む〜ま〜同〜〜その〜よ〜は〜女〜優〜や〜さ〜〜と〜
 色〜白〜は〜黒〜ら〜の〜ひ〜〜て〜送〜〜ま〜聖〜掛〜も〜〜ん〜白〜妙〜の〜木〜二〜の〜休〜
 も〜忍〜れ〜用〜く〜の〜指〜ひ〜末〜廣〜の〜ま〜ま〜廣〜の〜ら〜の〜〜い〜家〜の〜品〜ある〜も〜か〜く〜
 心〜と〜お〜く〜ま〜や〜され〜れ〜殊〜あ〜く〜玉〜の〜ま〜ま〜か〜る〜旦〜の〜神〜お〜お〜
 笏の代りを勤めるより冠婚指物女を伴はせり水すれ顔金〜
 整〜さ〜る〜の〜如〜あ〜る〜一〜の〜玉〜の〜扇〜の〜月〜あ〜く〜ら〜答〜の〜花〜を〜ち〜
 た〜扇〜の〜情〜け〜扇〜ま〜は〜め〜り〜増〜の〜浦〜的〜武〜士〜の〜琴〜を〜は〜〜
 みる〜よ〜眉〜を〜打〜て〜光〜ある〜扇〜を〜扇〜め〜〜は〜〜い〜女〜の〜世

渚の徳りのまゝ家やもむるさうさうさうんと顔を擲て政宗の大
量をあらうつらぬといふとさうさう中にもゆの面白とさうさう
徳川家の鳥印の輝き十九代の久しきさうさうさうさう徳川氏
の紋章とありていひ別れの先陣は金色を耀やうしたるあといひ自
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
言罷さうさう秋の神とさうさうさうさうさうさうさうさうさう
りさうさうの代用を動さうさうさうさうさうさうさうさうさう
はんとさう信安の老く黄花の家は媚使ひ長髯の老を拂ふの
身とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
一言をほつた老のさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あけりあ代をあふさうさうさうさうさうさうさう

乾 松 羽

旧幕の時相州函根山は東海色の要路ありんばよふ年を居て八
州の咽喉を堅くむ人牙は放つて肝とめて要とて肝要のやまを
聯らね唐島の要石も動きあまを表せとされいさうりのわ
の要のありてそ根本を堅めさうさうさうさう社末廣の名も負
るあさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
上棟の誇りもの八車のめく固く結ひ合され亦千葉並踊の頬
冠さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
昔を懐く下原唐の浦りも母衣うけさうさう嫌武者を招き屋島
の瀧風さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

泣承のつゝ一可しとてはくいと程哀れを留むされと人の母の昔
を歎ひのあゝん限りこれにあらざるもちて茲の嫁娶彼れ
入聲家後り店に居きより神は頼實き貴くよとて人の面揚え
必は是を擧めあゝるよとて是を盡其要のよく一ありて自在を働き
そ本を乱さひ一そし末度く業あることをあざとての故あゝんし
君この世の後世くうり 扇 の お

佐藤可梁

夫の物たるや末度と稱一五明と吟以神指の歌を始め総
てのあまてこれ用ゝれ詩歌を題一とい高尚の氣韻をそま
ひ丹まを寫していそ雲烟の控致を題一とい能借はたてら
るる

廟のまゝと題せしはより杖もや更りおには道は跡をも尋へて
つ白葉の助けとあるもまゝ二つのおまねあゝん
名目や 扇のこのあまのり

吉野鴉湖

五明といふも五つの際を備へるなまや中車といふいもろと人
のいふ物もかたものあゝるよとてあれ年まゝる物より偶あまま
まといふあゝる人あゝる礼義をそまゝまゝより一夏まゝ一くまゝよ
より一くわゝるり一いあゝるもの極ありけら一とねとすの物よ
く一とまゝあけつらひ一つもとらん只此大正代のは徳をあや
の神とやいふとす

あのみまの海舟のそと

坐右銘

三宅棹舟

心の虚雲出入の時、其心をたんと破る事ありて、氣を盡し、性
を存し、その心を以て人の心をさし、心を克己、優禮といふ處、されど、茶
は、我の備うて、その時、幽居の適ひ、その茶は、その時、その時、その時、
をつつ、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、
を、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、
て、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、
を、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、
て、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、

我心を如く探りて、月と花

佐藤可梁

本場もあつり、案を起し、相山の林より、ひげ、あつり、その時、その時、
その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、
蕉菴の、仙く、未、その時、その時、その時、その時、その時、その時、
只、其、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、
又、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、
た、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、

近藤草室

人の短をいつと、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、その時、

玉の膏の末の世その能能なる一のやや文の秋とあり
思ふも朝方を言哉世の有りたる国民たるおのれおのれ
ありつゝありと世にあり

銘曰

やまのきやゆき山原のりり子

山原得水

香の天地の間にありて一のやや文の秋とあり

やまのきやゆき山原のりり子

伊津有岳

伊津有岳とて一のやまのきやゆき山原のりり子
ありて一のやや文の秋とあり
自ら言ひて世の間にありて一のやや文の秋とあり
かろくとて一のやまのきやゆき山原のりり子

其角讚

伊津有岳

日の光の影を徐くことありて一のやまのきやゆき山原のりり子
ありて一のやや文の秋とあり
自ら言ひて世の間にありて一のやや文の秋とあり
かろくとて一のやまのきやゆき山原のりり子

鷹やうりけん甘めをほして忍ら百々の日干魁をそくるる万甲の
其土を信一と名をふるを極權を信せしむる徳や富と書
く耕と勤勤重も余信を仰き能周少所あるをいひて我
その信をあたりに信より出で信よりまき信倫奇文のす也

ゆめまに信のむの白ひの邪

石田梅宿

あの中へ柳と梅と菊の自後せしまゝそつちる音も其角先生
ら舊の十哲の随一とてあくと其籍を富と書をまき龍うそあひ
日蓮上人の著意をまてひて一家をり信ら画をよくと信より
酒を嗜む酒と信とて李白の氣韻あり將そ信後よける

や石田の吉野と信を龍田の信をまてせしめくそそ余節尚
余より先林うら大儒の身をかきう一氏の困苦をあまひて三節
るを彩り天地の神を感動せよあ翁のけ化え八百あるの道をも
たうら山ゆくりあく病床よりまうをせしはま前よ詞をかき信より
あきうらをまて信と法廷をまてしと師弟の自縁の信より
ぬらあまう田を信と信と信を著し後ま家て風を起して其の
のてま及る信と信と信と一寺の風流信とまおまのてま信と
ま信と信の神信と信と邪

そやうあまうと芭蕉の信哉

田頭半窓

その下に柳根あり門今そ角岩をたありとつね先右の翼とる玉
ひもろうるる哉岩の身を浮く初春武と滑流をそそぐとひそ
いさとの形あをそそぐ一早と女や子の泣き方へ極くひりとい下さぬ
のく情をそそぐく実もれをそそぐく秋の雪を情をひりひやうむ
又一句鬼神を感せり一丹謀のいさをいそぐく世の人のあるところ
ありまのそそぐのそそぐ古とそそぐのそそぐ

月をのりし神あり佛あり

佐藤可梁

そそぐやうあふことそそぐ角よ及りひとのまのれ一名月の光いあれ輝
き路のよあひのそそぐのひりけり方案よほらるり三匹のそそぐそそぐ眼

一派のそそぐあて健周中あそそぐ傍らにゆゆしこの人やこの色の鬼神とて
仰えそそぐ極もあひりそそぐ夏木と

安藝昌漢

祖翁のつよあて宝井翁の著所うるとん恰も山う芙蓉峰あり
くは楠公あとの類ひうそそぐの忠臣十哲甲の魁首とやいそそぐ
此そそぐや極業の名れあそそぐ

久保木聿水

極のそそぐそそぐの徒とそそぐのそそぐのそそぐのそそぐのそそぐのそそぐ
又そそぐのそそぐのそそぐのそそぐのそそぐのそそぐのそそぐのそそぐのそそぐ

昔これ形をやらふかその中丹ほそあるかよく西風をさハ
知くそのと相相もさるれとつや又酒は遠く彩彩よ赤
飯ふと戒をうけしもそ一あふ何ふ戸の福をさうれて身
月影の物凍きをさうらうされの三圍よるをいのと早田をう
ほしきくそまともまけし古今もあふしうき切らつ種も
あまきまきしけんとかしうらむるをさうまき

ハ東梅をさうまきくそののめらみり形

松田聴松

法祖又大梅五任

小島梅外

十哲の岡一匙と曰く英俊たるもの只そ

昔とつる事願ふ者ハそ肉をほつ事難ありのいそ趣をほとくあうり

此相英俊ゆそそ骨をほのこのい其家遺のうちに麻あり細とあり
て百尺竿頭進歩の人と云一易は曰晋は進也明地上に出頭て大
明に聲く稽りいしきを以て其の角に晋と進と獲つ三千の後
身此位會ふある者恐らとハは相つ人あるし

祝高壽

吉良蘭亭

伊達乃をまき山相いそ笑まの響より月のためもまねくとあまも
心をそまひいと事相まきあふの白雲のそはいあもあまの遠よ
つる所まのあまの道よあふのあひ四方よま名の舞き一石をり山
の梅まはは美花を降ともいりまこのまのよあも梅とまは位も位

へ登らせしれに後千有六の妻に九千二十の齡にをゆくと海めせしよ
 まゆくとまゆのひも信濃島とや和島とやもお似しちやあ
 れるを死よゆりの有らんと或時飛の形ちの跡石をばたまひとそ
 自らなれきこい齡ひもあやうしくけひのあのみおれたまのきり
 もうけしきしくしつるそののいしすも色ともまをそ乃於の齡
 ひと譜ともよごもぬ降代の空馬よもつませぬ世木の轡樹まう
 つ月をうそをせたるすの君のまひひあきりあく苦むを石の崖とま
 ぼほびくさものつけけりて *Angel's Wheel*

又くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

安藤石友

大分縣大分郡七井の人後高碩田翁のりき一の所傳に其の才人也
 孫傳のいと著き此より川田先生のつよ入抄をなすのさるる心をもこ
 ぬ尤も画古岳物語富くつり中巻にそよる假兼八房の流し活し
 貴氣雄豪義平の人を一睨しさるる尚の志をばこくくと実よ
 心誠をもあまひありされい後よるをらちのさした地よりと著く天
 下の文人をいふは、今を此つを教つるきくんとあしと、教傳の任を蒙
 り孫よ推美講義を命せしれきく、其己の書を述べて七十七とぬ
 へんと考息魯山う、あたひ花文子の推定を案し、其の傳は、より
 の後著のいふも、文あり古も画の展覧話き、きん、きり、まき、ぬそ
 會席三百るき、く、偏僻、やま、い、い、と、あ、ん、ら、く、ま、ま、ま、ま、あ、り、ら、る
 る、も、その、假、き、應、一、席、末、話、一、地、た、雲、林、と、言、一、ま、ま、を、影、一、く

遇きしとや買船漁舟の帆便りあるに艦を頼きて来去のさき
あまの粒さきらの名跡をゆく潮の傍り水さきしこよ浪のほとり
都くはらふ見遇しこころの塊をさきしつらふ時をさきしつらふ
ういぬの在りし声も鳴り哉

蒲萄嶺

庄司吟風

明治四年四月の日の日と月とを越後山奥船那蒲萄嶺を越ゆ
山中の行程と里とをさきしこころも山を送水と嶽を迎ひたふさきし
まらぬ山と深きまらぬ山とて坂の極あり峻ありさきし文をさきし
山路を埋め樹木を深し皓潔銀の如く雪丸の如く雪丸の如く雪丸

の候よいこころをさきしこころめて雪解の雪をさきし

雪の深しこころのまらぬ山とて似ぬ哉

竹生島

手島愛之

島ハ漸くこころをさきしこころ積れりし初ら巍くこころ中央と聲由尊
躰ハ天女大慈まらぬ現世未来の冥福をさきしつけあふむ繁き蓮華
今も雪のゆかりありおきて仰こころのゆかりもさきしこころ
四十九浦珠の長らふこころ島繁き

岩木山記

伊津有岳

之ゆきんそもかーとやいさんと云之ぬ々の詠遺され陸奥玉津
轉ある山木山古石に在る部の本木とてや母はつらつら由と云
はつて延暦の逆古東夷の鬼賊王威を敷き一時將軍田村麻呂
勅を奉りて是を討平らけ凱歌の功を讃ふて爰より社を鎮座せ
らば一旧跡ありても鈕絆の異形の面宇数部の軍兵跡にて幾
ふいふの星をを種れを撓ぬいさをして眼のありし志のいれては後
威いそま一なる白濁を律種氏累代を崇めて岩木山大権現と
西部の無路をわらけ魏々たる事如麻を造出するて金玉を鑄
ぬ美稱をさしておとそこのありしを以て草野のたつて勅して
岩木神社の号を給たり国幣社と列し陰暦の詠を以て諸人よ

指帶を許せ共々群集し一登山するゆりまたあゝ瘡を項を鑑を
著太刀を佩ともありて治は乱を忘ぬる上古の遺風とやいそ志
うて山の系を以てやよ美若峰とて整帯とてを以て文人墨
客の遺稿を奉りて追々くそも月まの風を系ありたも吟詠する
のれを揚をぬちを舟も描きかく書を抛ちけん見あぐれい系奴の香
家形天はちやまの岸をえあめこのある据の石よりおふ今浦おふ浦
九十二甲まは廣くも若くは流流はせ山木川の一派を以て離し
小川の田圃を治りて余傳る十三の嶺より北海を過る船を過し
就中一ののむははきさちとてまひりもまひりも以ちい係係船
く岩木山を念ふて感ふ謬もまひりも苗取植るて女の系乃至農具の状
をも歌りて曲を鏡の端を以て耕耜を以て家系を以て社禮を以て東華

の熟きる秋を憑むも多しき

ここのくはあ代りきやい岩木山

小杜若

村瀬佳笑

藤の住る伊豫玉野野郡延光のつゝ醍醐天皇の勅法をませむ
ひし如意輪被世音菩薩の山乗禪寺の布告ありて古鑑
あつたるい世の知るふきのほ陵の境内後の山よあそいと尊一とよ如
何あるあまの三種の木のあありて三て度生りの栗黄ある極小杜若と
てそそまやけりよ栗のつりのひよりつて絶ておく極に古株まつりよ身
をましくかこまうり跡きり小杜若の山や一存りよありて如月の末

より種はまよそをばをばをまのつゝ三すまをひしとやけりよいん方
あす予獨り株をばて鉢まつりし如の山ひとあそといふもあま
よまよいよあをのし生て花をば結果をば再ひるばて鉢まつり
のせよまよいひの培をのほきををるもや学深く咲出てとりの
極めとあまもいしと水くくそんそん

おののつれをりをとりと杜若

初瀬寺記

中島水石

隠居の初瀬寺は一帯の清流を巻居りてひし面を築きて
屏風を圍みたりとそこのやとらめきたるあたとひ極をひら

かたも似て中央は大蛇園をかまし廻廊に後より階を極く左右
の信房上下の字寮に孫路よりして神社あり半塔ありこれ菩薩
聖帝の園境せるありと云ふありし金胎ある部の學法聖の園は
むのふことしう幅狭くまの位置まかりまし水もとりぬり
詩歌よありし遠近のまの古人のまの遠近のまの遠近のまの
そふふいもまありし舞のまの世のまの世のまの世のまの世の
りしと云賦まするもあらぬまのまのまのまのまのまのまのまの
よみなるのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
まの西上人のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
籠踊まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
袖まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

むの一人の曰く天徳を授お地事を表まとは山まてうこのひあき
ト並の証あり

いつとてゆめの水まをむの初階は

坂本八景

中山梅晴

和漢八景を辨ひて留置連徳の美をまをましと云うま教余多
限りありまをまをまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
揮り置置の八景をまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
あまの一袖まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

月影や雪のまき——峰の松
大谷の雪 雪の初音や——とて雪の
柳の雪 ありてはありまきの松のうして
上光の雪 ありてはありまきの松のうして
天神の雪 吹立てて雪のまき——まきほし
大仙の雪 数えゆる峰あり——とて乃月
八幡の雪 起りて峰のまきよおきよ
越山の雪 郭のまきとちり松の雪
親善の雪 冬枯の中より雪の系

訪古墳

山口沙明

明治十二年癸卯十二月五日、素日、素日、素日、あり、兎島郡天崎の浦、到、渡、
辺、に、ま、り、一、つ、の、五、輪、塔、あり、諸、人、の、志、を、も、ち、し、と、向、人、の、志、に、
吾、田、與、を、郎、基、家、の、塚、あり、と、答、へ、付、く、事、と、吾、田、與、基、家、の、塚、
の、積、子、ま、り、兎、島、郡、天、崎、の、浦、に、ま、り、五、輪、塔、あり、諸、人、の、志、に、
争、始、り、廣、く、集、聚、を、決、せ、て、吾、田、與、基、家、の、塚、に、つ、て、自、ら、鎧、を、捨、り、只、一、輪、
敵、中、に、孤、入、敵、對、多、討、死、す、り、是、を、見、て、毛、利、方、より、も、遠、く、
打、出、す、敵、砲、を、申、田、四、所、ま、り、打、ぬ、れ、と、れ、と、於、尸、を、踏、越、え、勇、
奮、突、戰、つ、り、陣、頭、を、討、死、す、り、あ、ひ、と、吾、田、與、基、家、の、塚、に、ま、り、
と、こ、り、ち、り、ち、り、と、あ、ひ、と、吾、田、與、基、家、の、塚、に、ま、り、と、こ、り、ち、り、ち、り、と、
浦、を、一、塚、に、た、り、と、吾、田、與、基、家、の、塚、に、ま、り、と、こ、り、ち、り、ち、り、と、

浦を——塚にたり——吾田與基家の塚にまり

十抱松

鶴岡良志久

松の志未を種もも陽氣松ありとあるはと更いよつてもあらぬと
陸奥松は郡道沿つての郊野に傘松と号する松ありそのこと土登氏
の系地より氏系女正たりし時いよつて南郡松を送りて松の肥料
一又ふもつる所の蟠龍松を源列松の名つても所ありとす
延河井の松は十抱松といふあり即播磨に近き所ありて佳考子
葉家の臣青木松おちの意松ありとすはよつてその松は道邊にて
影のくもをのりてぬねやまの月

二荒山記

樹泉未隆

下毛國宇都宮市街中夾み此ませ一の名山あり則ニ荒神社
を結め祀れる所あり神靈を人皇天代崇神天白皇の皇子豊を城入
彦命を祀りたまひり云々餘特き著明きハ昔ハ昔ハ今ハ今ハ
して雲々のくく影ヲは種とあり山の東南に汎波山加波山と
望めハ多雲遙く此系を帯ひ不ハ洞窟の中より陽志らぬ雲の
頂をうきせぬ原中巖壁のまはちいとまきう後りて西水は雲山
ハ田野の眺むおしけき菜のふのせりまををぬ松は山のむき
錦を欺き回つてつとせり此雲霧のちりハ松屋の漁舟木の葉
をせぬらまハ如く西山ハ割首の店ありををぬありて四時の子
を白くしといふとありて自鬼ハ温泉あり神あり四半ハ腹のち

いづれも早く一町をうり隔りて下のまゝ留りたるは招魂社松
尾社あり榎樹数本を植つらぬたり杉野際を流るゝふのり戸軒
をうりぬて甚る目と引の如く喜する四半の所とすりてなるも維新の
うへ年二月よりち開けて七十三所ありとのまゝ下毛才の空
匠とのつて予此地を周りと看てまゝも此山を流るゝ神の加
護を無とせぬふのりやらの此山を流るゝ光のまゝを流るゝ御
りやらのまゝを流るゝのまゝを流るゝ御のまゝを流るゝ

流るゝまゝを流るゝのまゝを流るゝ御のまゝを流るゝ

高野山

庄司吟風

高野山のまゝを流るゝのまゝを流るゝ御のまゝを流るゝ
流るゝまゝを流るゝのまゝを流るゝ御のまゝを流るゝ
又母の休るゝりては苦は清く水

庚嶽記

加地其流

とて逢まよひ月伊豫守宇摩郡おろ色の鏡山を遊て海を津根
山の灰り山嶽に到るまゝ形勢峻峻十段ありあり石原を
むらぬ若菜の大河原を流るゝ自らの流るゝ水光激流と
碧り玻璃を流るゝ流るゝ御のまゝを流るゝ御のまゝを流るゝ

昇て岩を攀ち根ニ三株を搦めて岩の端までけからうと通路
 の便とあるそり節を信じて仰て險嶽を登りて備へて急流を渡る
 傍りやいかゞ走獸を猿とて下りて岩を攀ちて危きを知らず前足を踏
 まりてとつらうらをかて戻り戻りて又降りけりともや叫ぶ呼お
 ろひきや深山幽邃の中かゝる山水風物の美をらんといふと物さ
 ず暫くも崖上よりめりて一時の涼風秋を信じて心なきをむ
 涼〜さや〜ゆき〜と〜と〜と水

虹の松原

太田杜月

松浦濱崎ある虹の松原に於ち虹の輪を似て水に映る如く呼ぶと一又

里程二里あるなをよて二里の松原も云眺望や海と人海と云の端の連
 りと老樹枝を垂れ向山自ら若葉あり実も稀なる傍地と云一と云は
 松原に夏の夜よりと云も云すの端の端よりゆて雲を怪しむは
 中里よりと特ひ更なるといふも謂はれあると云と特ひ松原に云と
 呼ぶの如く松原のけ涼〜と〜と〜と浪の音

有無菴記

山内露英

物田の松樹百本あると云ありて田中と云の里より年よりなる自然の老樹
 ありたりそのと田中松原と云の菴原と云のけんはより老木を信する
 と云い言傳ふるに松枝葉葉をえと云りての言傳ふるも余の木を先と云

高きよりてかへぬ

川風は消えたりや月の露

草くさき

晋 永機

園中焼う井の傍は山椒の木のちりきりありそそ枝の微あるや
よりの鶉の早贖とついで蜂のさすうりありとを道よききりたる
をさしきり元祿西子のとくそそ山寺の原の山寺より遊びし梅
の植まよそるるの香吹と探り出さるも是ききりそそ蜂のやひ
たるより新さる風物のゆきを定めてゆくもむむと効めて
かき籠の便りとせり

甲執うやすやくもそそりのきりあしり

温泉の記

晋 永機

東四明の坎位を考ふひくりの湯湯ありといはしり氏の軍破れ
し折石を産うのやより湯出せしやむの湯のふを記念として今
猶湯田の一傍地ありひと日暑きを避へる為よ金令梅ののまを
をきくめては湯泉をいほき高きたる驪山朱樓紫殿の三面をう
ららやゆくも画をえたるのそそ園のやよそ園の軒端とこ
しあしよ運あり池あり山あり山いさるのふといふも折石のそそく池
い流しとそ雨れと魚池の遊方よりあり南董康をうけ蟬を身
を脱して流しおのそそりといふそそ園のそそり休とそそりて先奇あ

ことわりめやく

ついでに葉を神倉の里に於て育ちぬ

望嶽

三森幹雄

頂ハ天をきりて高く据野ハ地を拂て廣く風を向をきりて
て形を影をきりて雲ハ空を放ちて空を切りて解をきりて造作神
秀負ききりて空山のうらよたせり

不二をきりてみる水の蒼あきんくの如

箱根七湯記

三森幹雄

山をきりて大古の如く日長うそふ年みせりそふ心をもつて
健康をきりて大湯界を務めきりて大湯界に於て三年六月の如く
司鬼遊の如きと云ふ杖を底倉の仙石橋に掛く此等ハ箱根七湯
の布央よりして三湯三湯よりして下をきりて南といひ中をきりて下と云ふ
底倉居ありて二湯あり湯元塔の湯此湯の如きと云ふ湯者
被地ありて湯元塔の湯ハ奥よりして通路をきりて南といひ中を
横きりて南をきりて湯元塔の湯ハ奥よりして通路をきりて南といひ中を
解をきりて二湯有る余の湯湯界の湯ハ奥ありや右の湯ハ奥あり
山ハ箱根の湯ありて三湯揚よりなる山ハ湯界の湯ハ奥ありて
三湯ありて湯元塔の湯ハ奥よりして通路をきりて南といひ中を
りて湯の湯元塔の湯ハ奥よりして通路をきりて南といひ中を

新羅三郎の石を傳はるは海に石踏割る木がたまたまこの毒蛇退治
の功を獲る所との廣く當我之弟の塔と三塔あるは二つ山の尾に在り
多回の傳仲の塔より一は熊野の神社に温泉神ありあまの箱根の
神社に底倉村の神社あり一は昔白帯詣詣の地を本社とて昔も
まじり塔の時河首より山阿弥寺に彈草上人の丹基を日本三塔
の二つや堂の島の夢想法師田居の地を此の窟の遺教あり常
泉寺の底倉の底倉村を湯陽院とて殊に木ありあり大ま
臺の邊曲氏の曲天閑の軍器傳言の下ある藤氏の傳の地や
の林業ありと存持を大閑の石尾に伊達海道の神傳の地をいふ
あり大地獄や地獄の軌を依て大湧谷や海ありと改あり大瀨の地
川あり白帯の國木の湯澤あり一は島の白帯ありなる

五十五

て傍地旧蹟此をを聲をたはる王上白土后宮もや下あり屋といふは
法に聲をたはるをいひとある傳言其の歌あり
實の山ありとてなむ傳言といふれりなるに異國人も越後之地と
して高を蓬萊葦石の傍に築けり此の山に坐す川の流りとて
を流れて此の山を向てゆるい魏といふてををくはをを繞り
るるに飛へとも傳言といふれりなりとてあり其の山に坐す川
を流るるを流るるを長五百貼の葉も一日の川より一は
傳言の流るる魚ありといふ

日一回一け一またあ一又の山

新羅三郎の石を傳はるは海に石踏割る木がたまたまこの毒蛇退治
の功を獲る所との廣く當我之弟の塔と三塔あるは二つ山の尾に在り
多回の傳仲の塔より一は熊野の神社に温泉神ありあまの箱根の
神社に底倉村の神社あり一は昔白帯詣詣の地を本社とて昔も
まじり塔の時河首より山阿弥寺に彈草上人の丹基を日本三塔
の二つや堂の島の夢想法師田居の地を此の窟の遺教あり常
泉寺の底倉の底倉村を湯陽院とて殊に木ありあり大ま
臺の邊曲氏の曲天閑の軍器傳言の下ある藤氏の傳の地や
の林業ありと存持を大閑の石尾に伊達海道の神傳の地をいふ
あり大地獄や地獄の軌を依て大湧谷や海ありと改あり大瀨の地
川あり白帯の國木の湯澤あり一は島の白帯ありなる

たるもぬすは國のちもとにあやうな流波草をやらんおれきうり
 てむのしゆらりるやうにもちのちもききこのねねあはれあらし
 薄きあまの砂のうららかなるにききあはれあはれききあはれあらし
 おれきうりるにききあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし
 あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし
 その日あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし

賀 章

本 莊 烟 雨

明治三十二年思ひ部とあせし橋を在東松の系系のおぬき
 鎌倉氷の流れあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし

おきとおぬきあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし
 ともとらりて一いつてをこきききき抑きあはれあはれあはれあはれあらし
 七のあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし
 うららかなるにききあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし
 をあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし
 をあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし
 も教導の職をききあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし
 雅の道よ心を傾けあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし
 中よはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし
 世の恵もおれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし
 ともとらりて一いつてをこきききき抑きあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあらし

老支婦…
はらひも…
くも…
きそ…
めれ…
夕…
も又…
さ…
あ…

一府 陸前牡鹿郡 渡ノ波 故大久保二府 德風 陸奥国津軽 郡尾上村 西谷德風

一虫 三向国渥美 郡六連村 河合儀一 得水 伊勢国山田 外宮 山原千秋

有岳 陸奥国津軽 郡黒石村 伊津傳兵衛 杜月 肥前国大村 上波佐見 太田郷右衛門

露英 全北津軽郡 崔田村 故山内祐古 澄江 故大梅居秦長四郎

魯堂 東京千住 中組 高木市兵衛 竹里 常陸国河内 郡八地村 木村慶三郎

梅晴 讃岐国高松 新通町 中山賀雀庵 里川 陸奥国南津 軽郡枝川村 工藤七兵衛

梅宿 長門国赤間 関観音寺町 石田清太郎 可梁 豊後国日田 隈町 佐藤可梁

半寛 伊豫国今治 中濱町 田頭武三郎 佳笑 伊豫国野間 郡延喜村 村瀬英親

荷成

陸前牡鹿郡
石卷港

和田佐五七

雨江

東京藤江町

足立通

揚堂

三河国北設
樂郡市原村

大橋亨

聿水

全本所相生町三丁目

久保水聿水

棹舟

伊豫国宇摩
郡土居村

三宅棹舟

榎女

全亀沢町

山口桂華女

令松

常陸国河内郡
若葉内縮荷

松田源兵衛

鵠湖

全深川町

吉野確治

月雄

越後国北蒲原
郡西叢

坂井周喜智

永機

全向島三圍社内

晋其角堂

良志久

下總国植生
郡酒々井驛

鶴岡縫之助

煙雨

丹後国與謝郡江尻村

本庄宗武

蘭亭

伊豫国北宇
和郡御内村

吉良壽一郎

聽松

東京深川美岸町正風社

松田亭々堂

雨水

讚岐国那珂
郡金倉村

脇平五郎

鷺居

伊豫国温泉郡小栗村

奥平梅滴庵

愛之

近江国伊香
郡西阿閑村

手島芳三郎 二鼎

尾張国知多郡加木屋村

久野善右衛門

草室

備前国邑久
郡五明村

近藤有年 而嘯

常陸国多賀郡平瀉

後藤平兵衛

吟風

羽後国北秋
田郡阿仁前田

庄司兵之助 嘯山

東京南葛飾郡砂村

荒井明良

其流

伊豫国宇摩
郡下柏村

加地 貢 菖溪

阿波国板野郡川端村

安藝熹平

旭扇

越後国村上
郡山辺里

中村飛席八 松翁

讚岐国多度郡中村

乾 百内

幹雄

東京蠣壳町二
丁目明倫社

三森香楠居 沙明

備前国上道郡西大寺

山口安太郎

拾遺

阿波国那賀
郡椿泊浦

宮寄脩平 遠塵

佐渡国塚原山

塚原遠塵

真海

讚岐国大内郡
白鳥村

長尾真海 未精

東京本所亀沢町

山口 弘

未隆

常陸國新治郡真鍋村

掛巢源八

水石

大和國十市郡櫻井

中島與平

石友

豐後國大分郡松岡村

安藤石友

俳文友垣集

第三篇

但書肆發兌

兼題

但し入式ノ儀ハ本集配冊ノ上二丁ニ付概略金五十錢ノ刻費ヲ乞

春日遊步

春水滿四澤

嵐雪贊

山下納涼

夏雲多奇峰

團扇

旅泊秋

秋月楊明輝

鹿

冬籠

冬嶺秀孤松

銜

祝博覽會

題

画

何ニテモ随意

名所

随意

但

題畫 西影ノ限リ画工ニシテ挿画致セリ之存ハ必郡地名者法記載ノ被ラズ

右十五題の撰出文化の事をも題の都ふよりか括弧をこすある
一又一題の題を以りは招稿あるも他者の適宜なる一
右の第一二海友恒年集を次七月限り 余切他者凡そ名を限
一篇とす一撰稿の終つては相廻りて都ふより作速し
是招稿ある事と見せし

明治十七年三月

編輯 漆谷松青

校訂 松田聰松

再拜

文信所

東京深川靈巖町七十三番地

正風社執事

明治十七年二月十八日御届
同年 三月出版

編輯并
出版人

發賣人

漆谷恭輔

本所外手町壱番地

稲田源吉

日本橋通四丁目五番地

定價三十錢



泰山松石圖